

# 平城京東市跡推定地の調査 IX

第11次発掘調査概報

平成 3 年

奈良市教育委員会

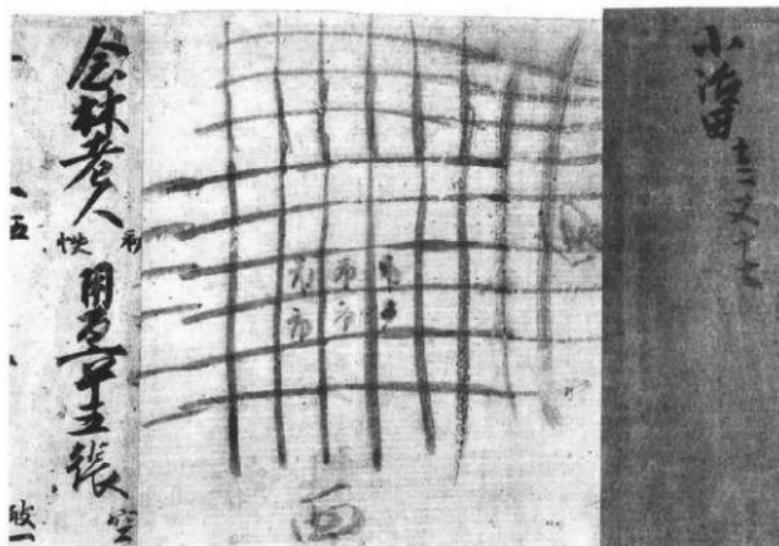


fig. 1 平城京市指圖（淨土宗總本山知恩院所藏『寫經所紙筆授受日記』紙背）

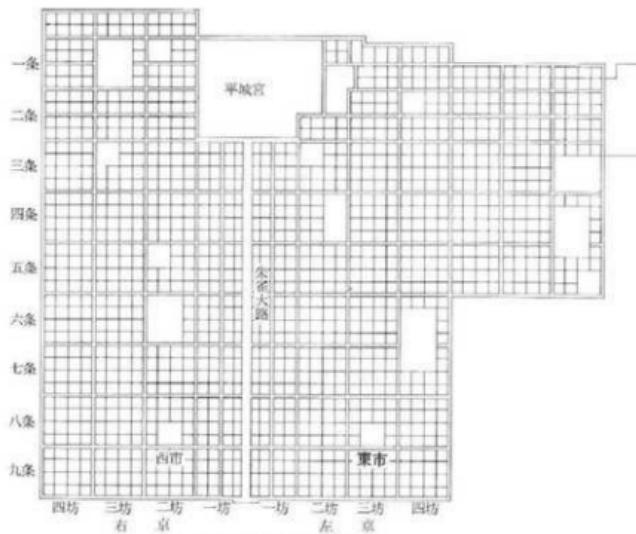


fig. 2 平城京東市位置圖

## 序

昨今の奈良市域におけるいろいろな都市開発は目をみはるものがあります。都市化によって人々の生活が向上することは大変素晴らしいことですが、あまりの激しさのために人々の精神的な豊かさが損なわれるようなことがあれば、これは憂慮すべきことです。

奈良市辰市地区に所在したと推定されている平城京東市は、西市とともに官営の市場であり、奈良時代における経済や流通の中心地でした。したがって当時の社会を考える上で東市の調査研究は必要不可欠であると同時に、東市を永く後世に残していくなければならないと思われます。当地区はまだ都市化の波がそれほど激しい所ではありませんが、このような優れた文化遺産が地下に残されているということは大いに誇るべきことであり、これを守り、わたしたちの子孫へと伝えていくことは、現在生きているわたしたちの使命であり責務であると感ずるところです。

最後になりましたが、調査にあたりまして多大な御協力を頂きました土地所有者の中野竹史氏をはじめ地元の皆々様に厚く御礼申し上げますとともに、今後の奈良市教育委員会の諸活動につきましても御理解と御協力を乞う次第です。

平成3年3月

奈良市教育委員会

教育長 久保田 正一

## 例 言

- 本書は平成2年度に実施した、平城京東市跡推定地内（左京八条三坊六坪）の発掘調査の概要報告である。
- 調査次数、調査期間、調査面積および調査地番は以下のとおりである。  
第11次調査 平成2年11月5日～平成2年12月28日 410m<sup>2</sup>（奈良市杏町579番地の1）
- 調査は、奈良市教育委員会社会教育部文化課（課長 小林謙一）が実施し、現地担当は三好美穂、関野豊、庶務担当は大原和雄、藏内康良、吉谷正宣である。また、調査補助員は笠井賢治、安藤美保、波辺典子である。
- 調査にあたっては、土地所有者である中野竹史氏（奈良市杏東町15番地）から御理解と御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。
- 本書の作成にあたっては、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部、浄土宗總本山知恩院から、写真、地図の提供をいただいた。
- 遺構の計測には国土調査法（昭和26年6月1日法律第180号）の施行令（昭和27年3月31日政令第59号）第二条及び別表第一によって定められた「平面直角座標系」近畿VIを使用し、計算には有効数字を小数点以下3桁までとしたが、造営単位尺の計算のみ5桁まで求めた。
- 「平面直角座標」近畿VIに対し、 $N\theta^{\circ}W$ の振れを有し、座標 ( $X=x$ ,  $Y=y$ ) を通る南北方向の推定道路心や側溝中軸線等は以下の方程式で表現される。また、その両端は調査によって確定した座標 ( $X=A$ ,  $Y=B$ ), ( $X=A'$ ,  $Y=B'$ ) ( $A < A'$ ,  $B' < B$ ) である時、 $X$ ,  $Y$  は以下の範囲をとる。本書ではこれを採用した。  
 $X - x = -\cot \theta^{\circ} (Y - y)$  ( $A \leq X \leq A'$ ,  $B' \leq Y \leq B$ )
- 本書の執筆は三好、関野が共筆し、編集は関野が行った。

## 目 次

Iはじめ	1
II調査成果	4
1. 屋 位	4
2. 検出遺構	4
3. 出土遺物	7
IIIまとめ	10

## 図 版 目 次

fig. 1 平城京市指図	表紙裏	fig. 9 溝S D029山土土器実測図	1 / 4	7
fig. 2 平城京東市位置図	表紙裏	fig. 10 調査区全景（北から）		8
fig. 3 市域推定地周辺の地形・条坊図	1 / 7500 1	fig. 11 調査区全景（東から）		8
fig. 4 市域推定地付近航空写真	1 / 4000	fig. 12 建物SB181・SB182（北から）		9
fig. 5 調査地点位置図	1 / 4000	fig. 13 建物SB183（東から）		9
fig. 6 調査区南壁土壠断面図	1 / 100	fig. 14 条坊遺構検出位置模式図		10
fig. 7 調査区遺構平面図	1 / 200	fig. 15 平安京東市図（『拾芥抄』）		裏表紙裏
fig. 8 井戸SE186平面・立面図	1 / 40			

## I はじめに

律令国家における経済活動の中心地は、奈良時代では平城京の東西の市であることは言うまでもないことがある。こうした市跡を調査し、研究することは当時の経済活動の把握だけでなく、社会全体を解明するうえで非常に重要であるとともに、現在奈良市で生活している人々が、長い歴史性を自覚し、同時にそれを誇りとすることの一助となるものである。したがって奈良市教育委員会では平城京東市跡推定地の調査を重要遺跡確認緊急調査として国の補助金を受け、昭和56年以来10年間調査を継続実施してきた。

各調査地点の位置は図に譲るとし、第1次調査から第7次調査では、東市を平城京左京八条三坊五・六・十一・十二坪に比定する有力説に基いて、主として各坪の範囲やこれを取り囲む道路、側溝および区画施設等の確認を目的としてきた。この一連の調査によって、通常の坪では検出例の少ない倉庫と考えられる柱建物がいくつも建っていたこと、推定地の外周には築地塀が巡ること、内部には各坪を区画する道路が通っていること、六坪の北西隅には隅櫓状の性格を持つ可能性が考

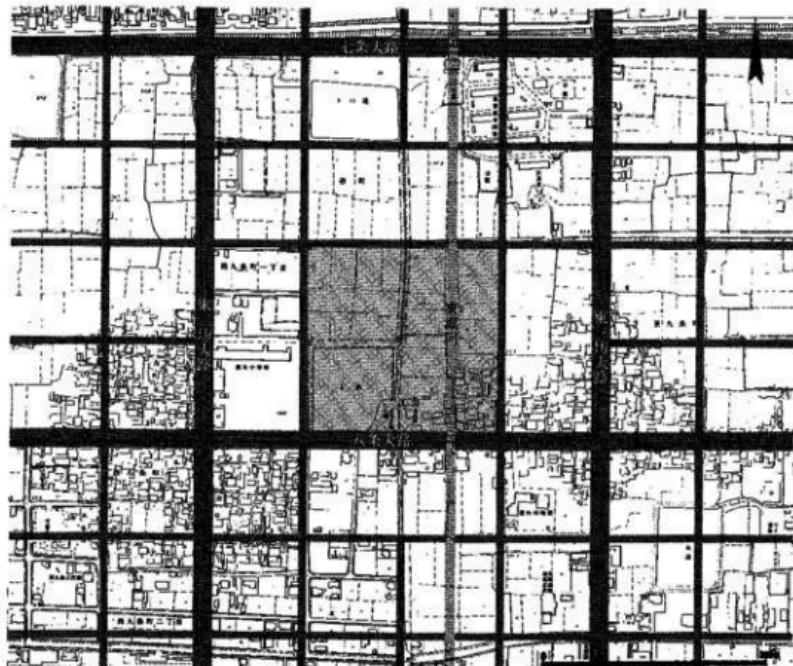


fig. 3 市域推定地周辺の地形・条坊図 1/7500(奈良市1978年作製) 1/2500「大和都市計画図No.25」使用)



fig. 4 市域推定地付近航空写真 1/4000 (奈良市教育委員会1982年撮影)

えられる縦性建物があること、十一坪北西部の築地は六坪の北西部と比べ幾分内側に入り込み、しかもその部分には四脚門が開くことから、六・七坪の間には門が開き、四脚門はその脇門であった可能性があること等が判明してきた。第8次調査以降は初めて坪の内部に入り、六坪のほぼ中央に当たる部分を調査した。これらの調査によって、坪の中心には何も建物が建っていない広場のようなものが存在していたこと、条坊道路の側溝心から完数値となる位置に割り付けて構築されたと考えられる塀があること等が明らかとなった。

以上の成果を受け、今年度は六坪の調査を継続し、市であることの証拠を得るために、六坪の北東隅部分、北門推定地を調査することになった。東市の東西に門が存在していたことは『日本靈異記』中巻 第十九に記載がある。また、一般的に当時の正面は南の方向であるから南に門が開いていた可能性も考えられる。したがって三方向に門が開いていたとする、北にも門が構築されてい

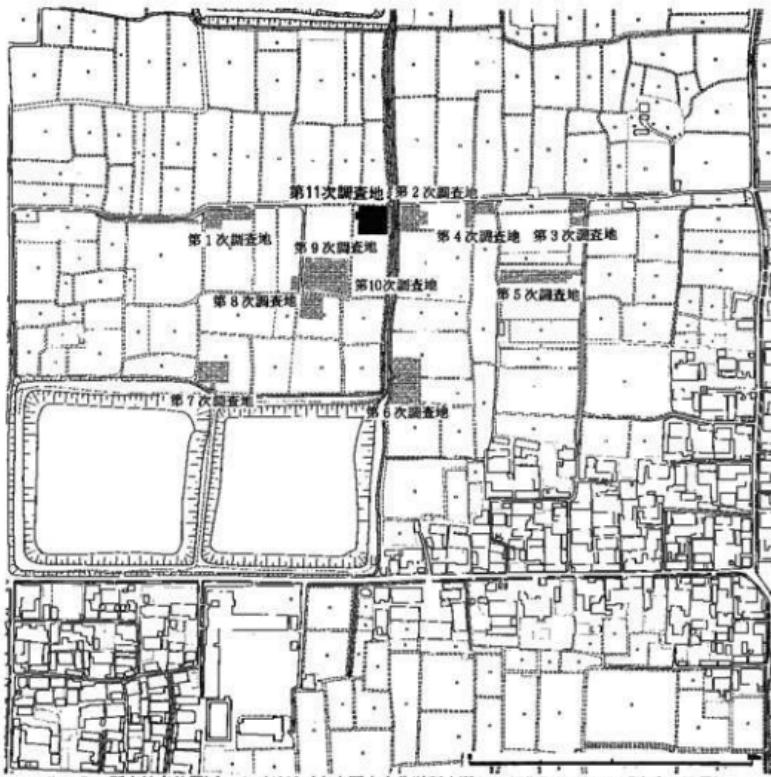


fig. 5 調査地点位置図 1/4000 (奈良国立文化財研究所1963年作製 1/1000 「東市」使用)

る可能性が大きくなり、しかも過去の調査では北門の存在を示唆する状況も確認されている。今回の調査によって東市の所在地を確たるものとする何らかの証しを手にするため調査に臨んだ次第である。ところで、「薬師院文書」天平勝寶七歳十一月十三日相模國司牒（『大日本古文書』四八三）には、相模國の「調郊」が「東市西邊」にあり、同天平勝寶八歳二月六日相模國朝集使解（同四一一四）には「左京八條一坊」にあったと記されている。しかし、同天平勝寶八歳正月十二日東西市庄解（同四一〇九）では東大寺が「調郊」を購入して庄としたが、その場所には「堀河」が南北に流れていると記されているのである。第4次調査や周辺の調査によって、東市推定地内では堀河は十一・十二坪の中央を南北に流れていたことが判明しており、「薬師院文書」の内容は現在東市の位置を推定している説とは全く背反する内容である。このように東市の所在地はまだ確定したものではなく、また、発掘調査でも決定的な証拠は得られてはいないのが現状である。

## II 調査成果

### 1. 層位

確認した土層は概ね以下の通りである。造成土の下には近世から現代の耕作関連土がある。次に中世の遺物包含層が三層、茶灰色粘質土、灰茶色砂混粘質土、茶灰色粘性砂質土と続く。茶灰色粘質土は西側拡張区のみに堆積し、茶灰色粘性砂質土の上には地山のブロックが散在している。この三層はかつての耕作関連土と思われる。これらの下に調査区の南西部では暗茶色砂質土、東部では茶褐色粘質土が続く。そして黄褐色砂混シルトの地山となり、その標高は調査区北半で56.0m、南半で55.8mである。遺構はすべて地山の上面で検出した。

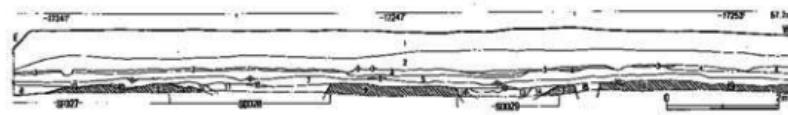
### 2. 検出遺構

S F027 調査区の東端で検出した道路で、六・十一坪を隔てる東三坊間路である。西側溝を伴って確認したが、東側溝は調査区外となる。路面の幅は4.5mまでを確認した。上面には部分的に凹凸があり、そこには茶褐色粘質土と若干の小礫が堆積し、遺物も少量出土している。この土は路面上の窪みに自然に溜まったものであろう。八条条間路との交差部分には築地塀の痕跡や暗渠、建物跡等は存在していなかった。

S D001 八条条間路の南側溝で、第1次調査で確認したものの東延長部である。北岸が浸蝕を受け、調査区外へ広がっているため正確な側溝心は得難い。幅は2.5m以上、深さは概ね40cm。溝は二段に掘られ、埋土とそれぞれの段が対応し、上層は暗茶色粘質土、下層は灰色粘質土である。調査区の東端で幅や断面の形状を変えずに南に折れ、後述する西側溝 S D028となる。その部分に条間路北側溝と本溝をつなぐ暗渠の痕跡と考えられる幅40cm、深さ35cmの小溝がある。埋土から8世紀中頃から後半にかけての土器が若干出土している。

S D028 東三坊間路 S F027の西側溝である。幅2.2~2.9m、深さ35cm、埋土や断面の形状は南側溝 S D001と同一である。溝の一段目は路面の方へ緩やかに広がり、二段目は中心より西に偏って掘られている。埋土からは8世紀中頃から後半にかけての土器が若干量出土した。

S D029 南側溝 S D001の南2.6m、西側溝 S D027の西2.1mの位置でそれぞれに平行し、



- |                |                     |                             |
|----------------|---------------------|-----------------------------|
| 1 淡褐色真砂土(造成土)  | 6 淡黃褐色砂混シルト(地山ブロック) | 11 暗茶色粘質土(西側溝 S D 028 埋土)   |
| 2 暗灰色粘質土(耕作土)  | 7 茶灰色粘性砂質土          | 12 灰色粘質土(西側溝 S D 028 埋土)    |
| 3 淡褐色粘質土(床土)   | 8 茶褐色粘質土            | 13 灰色粘質土(溝 S D 029 埋土)      |
| 4 淡灰色粘質土(旧耕作土) | 9 黄褐色砂混シルト(地山)      | 14 淡茶褐色粘質土(溝 S D 029 埋土)    |
| 5 灰茶色砂混粘質土     | 10 淡茶色粘質土(未耕作埋土)    | 15 灰色砂混粘質土(建物 S B 181 株穴埋土) |

fig. 6 調査区南壁土層断面図 1 / 100

逆L字形をなす溝である。幅は1.8~2.8mであるが、調査区の西寄りで急に幅を減じ一度途切れる。深さは南側溝SD001と平行する部分では概ね20cmであるが、西側溝SD028と平行する部分では二段に掘られ、更に底部には不整な起伏をもち、深さは一定しない。上層の埋土は大量に炭粒を含む灰色粘質土で、8世紀中頃の土器が多く量に包含されている。何かを焼却した残土と不用な土器を廃棄したものと思われる。下層は淡茶灰色粘質土であった。

**SD030** 東三坊坊間路SF027上で検出した素掘溝である。長さ9.2m以上、幅30~40cm、深さ4~8cmである。N30°Wの方位をとり、東三坊坊間路の向きと一致しない。埋土は坊間路上の堆みに堆積した茶褐色粘質土と同じであるため、ある時期路面上に掘られた溝であろうが、性格は不明である。土器が若干量出土しているが、細片のため時期も不明。

**SB181** 調査区の南西部で検出した南北棟の掘立柱建物で、梁間2間(6.0m)×桁行3間(9.0m)以上を確認した。南の妻柱列は検出していないので4間以上の建物になると考えられる。柱間は梁間が9尺、桁行は10尺の等間である。柱の掘形は一辺約80cmの隅丸方形で、深さは側柱で50~70cm、隅柱では70~90cm、柱の直径は約20cmであった。建物内部には床束の可能性がある柱穴

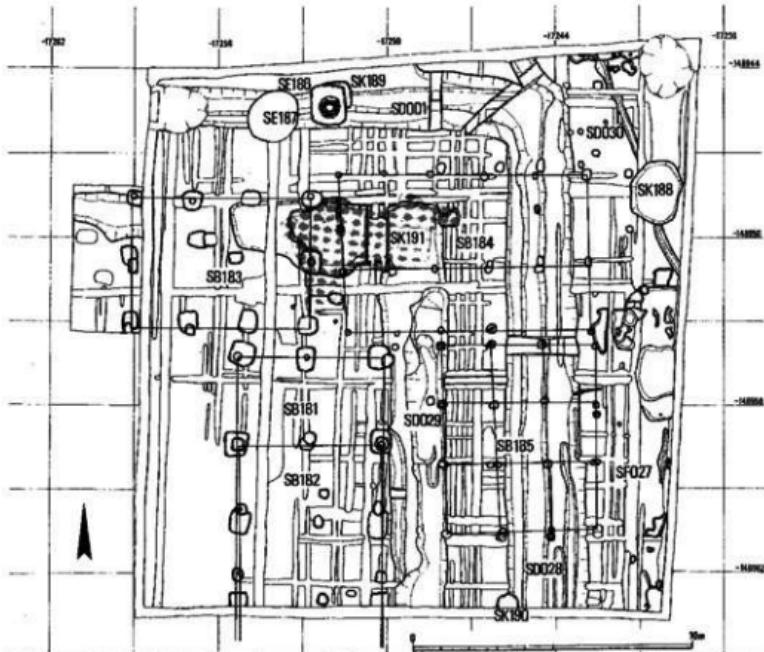


fig. 7 調査区遺構平面図 1 / 200

を持つ。溝SD029が埋った後に建てられている。

**SB182** 同じく調査区の南西部で検出した南北棟の掘立柱建物で、建物SB181を解体し、建て替えたものである。梁間2間(5.4m)×桁行2間(5.4m)以上を確認した。南の妻柱列は調査区外へ及ぶため未確認である。柱間は梁間・桁行ともに9尺等間で、建物SB181と比べて桁行は若干短くなっている。柱の掘形も全体的に小さくなっている。柱の掘形も概ね一辺60cmの隅丸方形か、長径約60cmの梢円形である。深さは側柱で約30cm、隅柱では約40cm、柱の直径は約15cmと掘形同様に小さくなっている。

**SB183** 調査区西辺から西側拡張区にかけて検出した東西棟の掘立柱建物で、梁間2間(4.8m)×桁行3間(6.3m)を確認し、柱間は梁間が8尺、桁行が7尺の等間である。柱の掘形は概ね隅丸方形であるが、大きさは60~90cmと一定していない。深さは側柱は50cm、隅柱では60cmで、柱の直径は約18cmである。ちょうど溝SD029が一度途切れる部分に位置しているが、これも建物SB181・182と同様溝SD029が完全に埋った後に建てられたものである。しかし、位置関係から建物SB181とは接近し過ぎて互いの軒がぶつかってしまうため、同時に存在した可能性は考えにくい。

**SB184** 調査区のほぼ中央で検出した東西棟の掘立柱建物。身舎は梁間2間(3.0~3.4m)×桁行5間(8.6~8.8m)で南面廂(廂の出2.2m)を有しているが、桁行4間で南と東の二面廂であった可能性もある。柱筋は互いに直交せず、柱間も1.2~1.5mと一定していない。柱掘形も径15~30cmの円形ないし梢円形と不揃いである。柱掘形から瓦器や青磁が出土しており、中世の建物である。地山上で検出したが、柱穴は上の層から掘り込まれていた可能性を残している。身舎南側柱列の東から2・3番目の柱穴は掘形が重複しており、柱の据え直しか、あるいは立て直しの可能性が考えられる。また、廂の柱列の東から2番目の柱穴は掘形に挙大の根石を持つ。

**SB185** 調査区南東部で検出した縦柱の掘立柱建物である。梁間・桁行共に3間であるが、南北6.7m、東西5.6mと幾分南北に長く建てられている。柱掘形は径15~40cmの円もしくは梢円形である。これも中世の建物で、柱穴は地山より上の層から掘り込まれた可能性を残す。この建物の北側柱列と建物SB184の廂の柱列が接近しており、同時に建っていたものとは考えにくい。これも建物SB184と同様に、南側柱列の東から1~3番目と、その1間北の柱列の東から3番目の柱穴は掘形が重複し、柱の据え直しか、立て直しの可能性が考えられる。また、南側柱列東から3番目、北側柱列東から2~4番目、東側柱列北から3番目の柱穴は掘形に挙大の根石を持つ。

**SE186** 調査区の北端部で検出した瓦積井戸で、南側溝SD001が埋った後に掘られたものである。掘形は東西1.3m、南北1.4m、深さは1.2mで、平面は隅丸方形である。井戸枠は掘形の南寄りに直径34cm、高さ14cm、厚さ1cmの曲物の側板を据え、その上端周縁に人頭大の河原石を並べる。更にその上に円筒状に瓦を積み上げている。埋土から13世紀中頃の遺物が出土した。

**SE187** 井戸SE186の西側で検出した井戸で、同様に南側溝SD001が埋った後で掘り込ま

れている。掘形は東西1.7m、南北1.6mで、平面は梢円形、断面はラスコ状である。深さ1.5mまで掘り下がるが、涌水が著しく途中で掘削を断念せざるを得なかった。井戸枠は既に抜き取られたのか残存していない。地山の土を混じえる灰黄茶色粘土質で一度に埋め立てられていた。埋土から13世紀の土器が若干出土した。

**SK188** 東三坊坊間路 S F027の上で検出した土坑で、東西1.9m、南北2.3m、深さは10cmと浅い。平面は梢円形、断面は皿状である。埋土からは8世紀の土器が若干量出土した。

**SK189** 調査区北辺で検出した土坑で、南側溝SD001が埋った後に掘られたものである。大半を井戸SE186に填されているため大きさは不明である。壁面は垂直に掘り込まれ、深さは10cmと浅い。出土遺物がないため時期も不明。

**SK190** 調査区南辺で検出した土坑で、平面は直径40cmの円形である。西側溝SD028が埋った後のもので、埋土から13世紀後半の土器が少量出土した。

**SK191** 調査区の中央で検出した土坑で、溝SD029に先行するものである。東西6.4m、南北3.7m、深さは50cmで、不整形な平面をなす。断面形は掘り鉢状であるが底部は平らとなる。埋土は3層に大別され、上層は暗茶灰色粘土、中層は黄灰色粘土、下層は灰色粘土が堆積している。下層から8世紀前半の土器が若干量出土した。

### 3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は土器が大半で、他に瓦（軒丸瓦6316D、姫寺所用複弁6弁蓮華文軒丸瓦を含む）、土馬、鉄釘などがある。全体の量は遺物整理箱19箱程である。西側溝SD028からは8世紀中頃～後半、溝SD029からは8世紀中頃、井戸SE186からは13世紀前半の特徴をもつ土器が出土。以下に、溝SD029出土土器のうち、遺存状態の良いものを選び図示した。

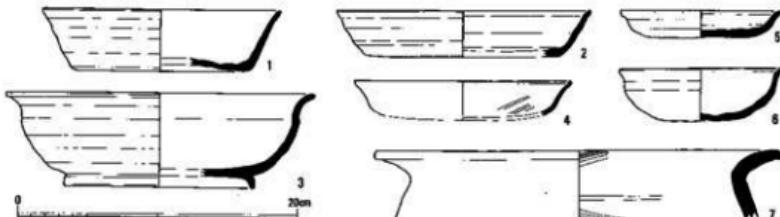


fig. 8 井戸 SE186 平面・立面図 1/40

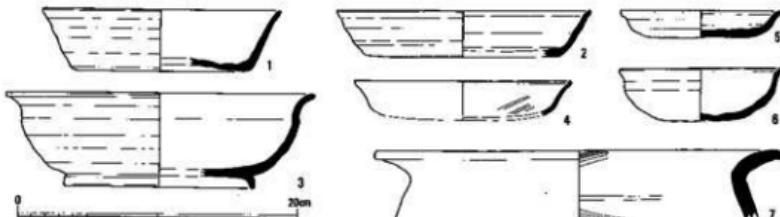


fig. 9 溝 SD029出土土器実測図 1/4

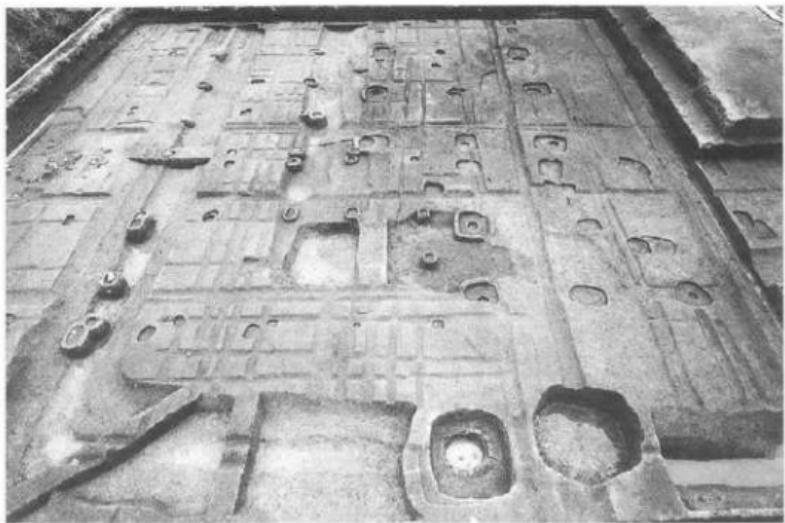


fig. 10 調査区全景（北から）



fig. 11 調査区全景（東から）



fig. 12 建物SB181・SB182（北から）



fig. 13 建物SB183（東から）

### III まとめ

今回の調査で得た成果は次の3点に要約できる。

1 東三坊間路と八条条間路の交差部には北門に関する遺構は全く存在せず、築地や暗渠の痕跡もない。第1・2次調査で検出した北辺築城は採掘ごとに造られていたことが判った。

2 坊間路を検出したことで、東市推定地内は道路で一坪ごとに区画されていたことが判明した。『拾芥抄』によると平安京の東市は各坪が独立していたことが図示されており、このことは奈良時代の東市を知るうえでも重要な手掛かりとなろう。

3 坊間路西側溝を検出したことにより坊間路側溝心心間距 fig. 14 条坊違構検出位置模式図離や十一坪の東西幅が算出できた。まず、側溝心心間距離であるが、第3・5次調査と奈良國立文化財研究所による左京九条三坊十坪の調査で得た東市推定地の東辺の小路の振れ  $N 0^{\circ} 27' 05'' W$  と、今回確認した西側溝最深部の中心点17を使用し、東西両側溝 S D 023及び S D 028の中軸線の式を求めるに、東側溝は式①、西側溝は式②で表される。これらから側溝心心間距離は式⑤より 8.573 m となる。また道路心は式①②の中央を通るので、式③と式上の点18が得られる。次に十一坪の東西幅を求める。第3次調査より十一・十四坪境小路心は式④で表される。東市推定地の東辺と北辺では条坊の振れが異なり、第1・2次調査で得た八条条間路南側溝の振れ  $E 0^{\circ} 14' 05'' N$  と式③④を用いると、十一坪の東西幅は 132.764 m となる。ところで、この値を一坪の造営計画寸法 450 尺で除すると造営単位尺は 0.29503 m となる。第7次調査でも十一坪の東西幅を算出しており、その時得られた造営単位尺は 0.2957 m であったが、若干短くなることが判明した。この値で坊間路側溝心心間距離を除すると 29.058 尺となる。幾分ずれはあるが坊間路は 30 尺で計画されていたと考えられる。

以上、今回の成果について概略を述べてきた。特に推定地内は道路で各坪が区画されていたということは貴重な発見であった。徐々に東市推定地内の様相が明らかになりつつある。だが、これまでの調査は推定地全体の2割程度にしか達しておらず、依然不明瞭な部分が多い。調査を継続し、十分な検討を積み重ねていくことが東市の実態解明につながって行くものと思われる。

$$\textcircled{1} \quad X = -Y \cot 10^\circ 27' 05'' - 2.336, 727, 894$$

$$\textcircled{2} \quad X = -Y \cos 10^{\circ} 27' 05'' - 2,337,816.032$$

$$\textcircled{3} \quad X = -Y \cot 0^\circ 27' 05'' - 2.337.271.963$$

$$\textcircled{1} \quad X = -Y \cos 10^\circ 27' 05'' = -2320.420 \text{ mm}$$

$$\textcircled{5} \quad -2.336.727.894 = (-2.337.816.032) \mid \sin 0^\circ 27' 05'' = 8.572504399\dots$$

16 ( $X = -148,945,160$ ,  $Y = -17,250,000$ ), 17 ( $X = -148,950,000$ ,  $Y = -17,244,730$ ), 18 ( $X = -148,950,000$ ,  $Y = -17,240,444$ )

これまでの調査成果及び座標値は、奈良市教育委員会「平城京東市跡推定地の調査」I～VII（昭和58年～平成元年）を参照されたい。



fig. 14 条坊選擇檢出位置模式圖

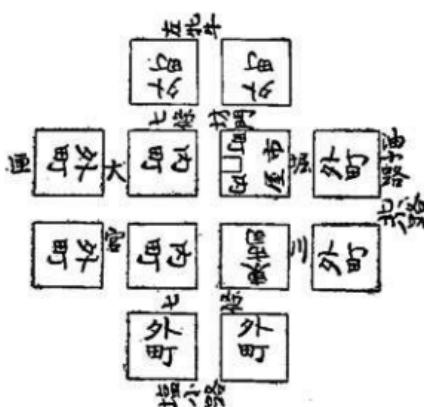


fig. 15 平安京東市地図 (『拾芥抄』)

平城京東市跡推定地の調査 IX  
第11次発掘調査概報

平成3年3月28日 印刷

平成3年3月30日 発行

編集・発行 奈良市教育委員会  
(奈良市二条大路南1丁目1-1)  
0742-34-1111(大代)

印 刷 共同精版印刷株式会社  
(奈良市三条大路2丁目2-6)  
0742-33-1221  
0742-33-7035(FAX)



表紙 平城京市指図（浄土宗總本山知恩院所蔵『写經所紙筆授受日記』紙背）